

お　年　よ　り　作　文　集

第　十　七　集

戦争秘話三編

石野田　道春（八一歳）　一頁

貧しい時代の話

梅田　武男　（八二歳）　十三頁

子供の頃からの半生記

鈴木　つる子（八四歳）　三一頁

思い出すこと

前田　喜曾子（八五歳）　五五頁

戦争秘話三編

昭和四年四月二十五日生 八十一歳

石野田道春（金五郎）

一、新聞紙に包んだ御飯

昭和二十年二月初旬の或る日曜日の朝だった。早朝より勉強に夢中になっていた時、けたたましい階下の電話に驚いて二階に居た私は急いで下りて行つた。

ここは日本橋茅場町で東京小運搬業協同組合の事務所で一階は三十人位の事務員で毎日執務しているのだが、今日は日曜日で休みなのである。受話器を取つて驚いた。電話の主は故郷（神津）の家の隣

の万五の元治兄だつた。元治兄とは幼小の頃より仲良くして温厚でやさしい人だつた。浅草からだといふ。道順を説明し再会を約して電話を切つた。元治兄は私より二つ年上だつた。

私は去年（昭和十九年）三月、向学の志に燃えて三月の卒業式もしないで受験のため単身上京しました。そして神田の美土代町に住んでいたので、近いこともあつて神田駿河台の明治大学附属明治中学校夜間部へ入学したのでした。十五歳でした。

昼は大和の静姉さんの紹介で東京駅前の丸ビルの森松組という運送会社へ勤めていた関係でこの事務所の二階を借りる事が出来たので



S19年夏 15歳 明治中学在学時

した。ここは事務所なので住んでいる人はなく、台所もなく簡単な湯沸室があつてガス台が一つ階下にあるだけでした。

食事は外食でした。当時食糧事情も悪く、米穀の配給の代わりとして、月初めに区役所へ行つて一日三食で一ヶ月分の食券を貰つて、その食券で「外食券食堂」の看板のかかっている店で割と安く食べられました。外食券も甲・乙・丙とあり、甲が学生、乙が一般のサラリーマン、丙が重労働者と分けられていて、学生でしたが、働いてもいたので、なんとか乙にしてもらいました。それでも食べ盛りの少年には満腹感は味わえなかつたが、何とか生きるだけの量はあつたと思う。

元治兄が着いたのは十時頃だつたろうか？ 当時は食べる所は外食券食堂以外、「雑炊食堂」しか無く、その食堂も一時間位並んで待たなければ食べられなかつた。それもドンブリの一杯ゴシヤゴシヤのお粥の中に大根やらその葉っぱやら人参などを切り込んだもので、安かつたが決してうまいものではなかつた。

お米が四合か五合位、母が小包の中に入れてあつたのが残つていた。お昼近く空腹なので飯を焚くことにした。湯沸室に釜があつたのか或は鍋だつたのか忘れたが、兎に角、飯は焚けた。

然し「お櫃」がない、当時は御飯はお櫃へ移すものだつた。今考えると何で「おにぎり」

にしなかつたのかと思うのだが、或はご飯が

やわらかかつたのかと思う。取りあえずそこに新聞紙があつたので、

新聞紙に移して二階へ持つて行くのだが、階段の途中で熱で新聞紙



S26年3月 結婚記念

が破けて、神津で云うご飯が「サイホウマケ」になってしまったのである。其の時の口惜しかつた事、今でも時々思い出す。

食べ物に乏しい時代、二人で仲良く指をなめなめ、口の中に時々砂が混じつているのをペツペツと吐き出し乍ら空腹を満したのでした。一年振りの再会で色々と島の様子も知る事が出来たし、兎に角懐かしかつた。

元治兄は大島波浮港の『カイマワリ』に乗つて『カシキ』をしているのだという。当時波浮港には「熊栄丸」とか「八幡丸」とか「定期丸」とか六・七艘のカイマワリがあつたと思う。

「カイマワリ」とは「鮮魚運搬船」のことである。浜で買つた魚を築地の市場へ運ぶのである。「カシキ」とは、その船の飯焚きをする「賄夫まかないふ」のことをいう。大島から魚を積んで昨日築地へ来て昨日の内に魚を降ろしたので、今日浅草見物に来たとの事だつた。

私は今年（昭和二十年）の一月、海軍甲種飛行予科練習生を志願

して合格し、五月入隊する事になつていた。当時唄にも唄われた予科練である。

入隊すると六ヶ月の訓練を受け、七ヶ月目には戦場へ配属されるとの事であった。今思えば特攻隊の養成の様なものだつたと思う。東京も空襲が烈しくなり、どうせ死ぬのなら志願して戦地で死ぬという気持もあつたと思う。

昭和十九年の秋頃だつたと思うが、私は丸ビルの会社で事務を執つて居ました。昼休み外へ出たら細い雨がシトシトと降つていまし。その時、宮城の方から東京駅へ向つて威風堂々として角帽をかぶつた大学生が卷脚紺まききやほんをして木銃をかついで行進して來るのであつた。かなりの人数であつた。思わず息をのんで胸があつくなるのを今も忘れない、学徒出陣である。

当時は「鬼畜米英」とか「進め一億火の玉だ」とか「欲しがりません勝つまでは」が合言葉だつた。唄はみんな戦争を美化する唄だつ

たし、小学校（当時は国民学校）から「忠孝一本」「忠君愛国」、天皇陛下万歳の基にスバルタ教育をいや応なしに叩き込まれた。

今思えば、あの戦争は一対何だつたろうと思う。

三月初旬入隊前に両親

にも会いたくて帰郷する事にして波浮港まで来たが、空襲が烈しくなり神津へ行く事が出来ず、三日位波浮で足止めをされて終った。空襲の間を何とかしのいで、長松丸（漁船）を数人で頼んでやつと神津へたどり着く事が出来た様な有様だった。元治兄もカイマワリを降りて帰つて居た。

帰郷している間に茅場町の宿泊所にあつた私の荷物や本も全部あの三月十日の空襲で灰になつて終つた。
そして魔の三月十四日が來るのである。その朝、元治兄が「道い、今日は恩馳オッパシへ曳き縄にいつてくらあ」と手をあげて行くので、私も「気付けて行つてこうやあい」と返事をした。これが元治兄と最後に交わした言葉になつて終つた。正午頃始まつた恩馳の空爆で帰らぬ人となつて終つた。

二、空襲

昭和十九年八月か九月頃だつたと思う。暑い日だつた。勤め先である丸ビルの「森松組」の会社で事務をとつていた。正午近く、警戒警報から空襲警報に変り、十分位経つたと思つた時、ものすごい音と共にバリバリと云う機銃掃射の音が爆音に交じつて三十分位続



いた。やがて音が止み警報解除になつた。

有楽町の駅と銀座がやられたらしいと云う事なので、みんなで行ってみる事にした。有楽町駅迄は歩いても十分位で行ける。有楽町迄行つた時、駅の銀座よりの道路に直径三メートル位の穴があいていた。直撃弾が落ちたということであつた。

ふと前を見た時、幅五十粁^{センチ}位の板の上に遺体を乗せて二人で日比谷公園の方へ運んで行くのを見た。三組位いた様だつた。手がブランブランして居るのが氣味が悪かつた。

後をついて日比谷公園へ行つて見ると二十体位もあつたろうか。白い布やら筵（ムシロ）がかけられていた。

改めて戦争の恐ろしさを知つた。こんな様子を見て予科練への志願を決めたのだと思う。

これが米軍艦載機による白昼銀座及び有楽町をねらつた空爆だつた。

三、体当り

其の日は宿泊所である日本橋茅場町に居た。昭和十九年十月頃だつた様に思う。秋晴れで良い天気だつた。三十人位の事務職員の人達も仕事をしていた。正午過ぎ、空襲警報のサイレン



が鳴つて、みんな一階の事務所の床下に掘つてある防空壕へ避難して居た。時間が長く外も静かな様なので、警報は解除にはならなかつたが壕から出て、みんなで屋上へ上がつて見た。丁度その時南の方から、かなり高い高度で一機飛来してくるのが見えた。然し何故か誰も避難しようとはしなかつた。突然誰かが「敵

機だ、B29だ！」と叫んだ。

その時、ななめ横の下の方から、小さい「かたまり」がB29へ向つて行くのが見えた。途中キラツキラツと光るのが見えた、今思うと太陽に当つて機体が光つたのだと思う。

又誰かが「アツ友軍だ、友軍だ！」と叫んだ。其の瞬間B29に当つたのでしよう、パツと大きな光が輝いた様に思つた。間もなく真黒い煙を引いてそのB29は東京湾へ落ちて行つた。

思わず「万歳、万歳」の合唱だつた。そして誰云うとでもなく手を合せて黙禱もくとうを捧げたのでした。

これが体当たりと云うものかと目から泪が溢れ出たのを忘れる事は出来ない。

明くる日、新聞に其の体当たりの様子が詳しくのつていた。散華した兵士の名前も載つていた様に思う。飛行機は陸軍機だが、零戦ぜろせんだったかどうかは憶えていない。

（平成二十二年三月記す。）



貧ますしい時代の話

昭和四年三月八日生 八十二歳

梅田武男（文五隠居）

昭和の十五～十六年頃、戦争の始まる前の時代です。当時は、神津の一般の人達は、それはまあ貧しいもんでした。

「貧しい時代」の話です。小学校五年生の頃でした、当時の「イギス」は今のように錢になつて稼ぐことができました。四月十五日前に漁協で入札してから、その年一年、九月頃まで入札に参加して買う家を決めていました。当時そこで札を入れるのが「市十」と「新八」の二軒ぐらいで、「今年は新八で買う」とか「今年は市十だつちやー」とか話していました。

そういう訳で、知っている人は憶えているかも知れませんが、私の頭の中に残つているのが、「一貫目」、今のキロ数に直すと三キロ七五〇グラムですが、その一貫目、干してカチカチに乾燥した物が、たぶん四円ぐらいだつたと思います。

それで当時は今のような時代ではなくて、学校で毎月毎月、保護者が学費として「保護者会費」を出していました。一ヶ月に二十五銭でした。今とはお金の桁けたも違いますが当時は二十五銭といつても大変だつたと思います。

それを持つて行かないと、まあ一ヶ月ぐらいは先生も黙つているのですが、二ヶ月、三ヶ月たまると、やはり催促されるわけです。それも生徒が四十～五十人もいるみんなの前で催促があるので、子供ながらに非常に嫌なことでした。

でも、催促される人は一人や二人ではありませんでした、土方に歩くとか給料取りとかの人は別として、一般的の家庭は大変だつたんだ

ろうと思います。まだ子供だったんでよくは分かりませんが、何回か催促されたことがあったので、私の家もお袋が一人で子供二人を育てていたので容易ではなかつたんだと思います。

そしてイギスの入札があつて、四月十五日の長浜祭りから口開けになるのですが、まだ寒い時期で、当時は何があつたわけでもなく、大人は素っ裸でパンツもはかずに潜っていました。でも子供は、そんな時から潜るわけにもいかないので、学校もあるし、今のように自動車で名組まで突っ走る時代じやなく、家の錠口からぼつぼつ歩き出して行く時代なので、なかなか出かけることはできませんでした。

その保護者会費が何ヵ月か溜まつていて、これは何かで錢を稼がなきやと思っていたんですが、四月はまだ寒いし、五月、六月と過ぎて、子ども等で寄り集まつて出かけたのが夏休みになつてからでした。

私と、籐八の同級生の梅田清一、
こびきやの大久保辰治、それと
あと一人の四人だつたと思いま
す。もう大人が潜つてしまつた後
で、そこら辺には無いので、「名
組いとイギスを潜りにいくべえ」
ということになつて出かけまし
た。

一口に「名組」と言つても、今の
「かずら」を「閻魔堂」の前を渡
つて、漁協の畜養地の処を上がり
あがつて「沢尻」に出て、それか
ら今の中の處の「峠山」を越

昔の名組から赤崎方面



に出て、それから「長浜」を歩つて、「三四郎」「シヨイカケ場」「ウラン根」と越して、とつ着く頃にはもう十時や十一時で日がカンカンとしていました。

当時はろくな「スカリ」も無いような貧しい時代でしたが、着くと一緒に行つた仲間と海に入り、今のが「赤崎」の方から「名組」の方まで浅い処を潜つてイギスを探りました。百目め（匂もんめ）潜る人もあれば、三百目（匂もんめ）潜る人もいたでしようか。

採つたイギスは生のままでは重つたくて、とても家まで背負しょつて帰れないでの、名組には浜が無かつたので「根ね」（大岩）の上で干していました。

乾くと重さが六分の一とか、八分の一ぐらいにまで軽くなつたと思ひます。逆に乾かせ過ぎると、今度は根に張りつ付いて、取りづらくて面倒なものでした。でもたいがい採り始めるのが昼前からなので、なかなか乾かなくて、生乾きのまま取り込んで、背負つてきました。

ドウコウ（石油缶）に詰めて長浜まで行くんです。長浜まで行けば浜があるので、その浜でまた干すわけです。

夕陽があたつて砂浜に干すと、どうさなくカラカラになりました。そうやつて浜に干してカラカラにすると、イギスに砂がくつ付くんですが、かまわざしまい込んで、また来た道を背負つて歩いて戻りました。

家に持つて帰つてもしようがないので、そのまま「新八」に持つて行きました。そうするといつも新八のじいさんが「まつたくまあ、この野郎共がまあ、砂あーば、ちゃんと、はたいちやーこずに！」と言つて、イギスを、はたいて、はたいて、はたいて、はたいて…、（笑）それはまあ買う人にとっては当然であたりまえの話なんですが、ひつぱたいて、ひつぱたいて、ひつぱたいて、ほんとに一粒も砂がひつ付かないようにして目方に架けるわけです。

その時いくらになつたかは憶えていませんが、子供の採つてきた物

きらきくでの海老網きより



で、行つて帰つての時間と、干すのに時間が掛からなければいいんですが、干して乾かさなければ持つて行つても錢にはならないので、実際は何時間も潜れなくて、当時の目方で百目か二百目、そんなもんだつたと思ひます。

それでも他に、名組の方は採つてしまつてから、家から近い「つまり」の周りへ行つて二、三日潜つて、「チチロ」の方に案外あつたので採ることができました。「つまり」の周りで採つたイギ

スは、浜へ干して、カラカラにしてから家に持つて帰ります。今みたいにビニールの類がある時代ではないので、そこら辺の箱の中に詰め込んで、天気になれば干してカビらせないようにしてためておきました。

それを新八に持つて行つて、そしていつものように、ひっぱたいて、ひっぱたいて目方に掛けて、その時に貰つたお金が六十錢に少し欠けるくらいの額だつたと思います。

新八のじいさんが「おしげ」と呼んでいた奥さんが「五十何錢払つちや一れ」と新人のじいさんに言つていたのを憶えています。五十何錢といえば当時としては大変な錢だつたので、それはもう喜んで帰つてきました。

そして盆も近かつたので、履物もめづらいし、と思つて、何処で買ったかは憶えていませんが、ゴム裏の草履を二十錢で買ったのを憶えています。そして残りを九月になつて学校が始まつてから、「保

護者会費」として持つて行つて、溜飲を下げた憶えがあります。

その頃は大人も稼ぐのに大変で、「初芳商店」のおじいさん達大人は「シシヨウケ」や「シヨクドウ」とかあの辺を潜つていましたし、組合長を長い間やつていた「藤造」の石田徳太郎さん等は、何人でやつていたのかは知りませんが、恩馳で「分銅潜り」をやつしていました。鉄の玉をつかまえて潜つていつてそれを離して、上にいる人がその分銅を上げて、そしてイギスを探れるだけ探つて手でかけて上がつてきて、また分銅持つて沈んで、そういうふうにして探つていたと話していました。

まあそういう貧しい時代でしたよ。名組に行くのにも、弁当といつてもたいしたものを持つて行くわけじやなく、イモぐらいのもので、家から三つ四つ手ぬぐいの端に包んで持つて行きました。親が居て弁当を持たせてくれたとか、そういうことは憶えがありません。毎年五月には学校の遠足があつて、たしか六年生以上、高等一、二

年生ぐらいまでは天上山に上がり、五年生以下は長浜とかでしたが、きれいな弁当を持って来て、ゆで卵も持つて来れる人は、男女合わせて五十人ほどの同級生の中でも十人はいなかつただろうと思います。

今の人気が考へても想像のつかない話でしようが、私達はそんな子供時代を暮らして來たので、それから昭和十六年の末になつて戦争が始まつてからはそれよりもつともつと酷い時代になりましたが、そうなつても、こうなつても、そういつた時代を生きてくると、そんなに抵抗というのは無いんです・・・。何と云うか・・無いものは無いんですね。(笑)

子供も大人も稼ぐ事には、まあ一生懸命でした。子供ながら、家からぽつぽつ歩き出して、よくもまあ名組くんなりまで通つたと思います。今じやあ車で行くのも億劫なもんですよ。(笑) そういう時代があつたんです。そりやあ酷い酷いものでした。どこ

が裕福だ、かしこが裕福だと言つても全体がやはりそういう貧しかった世相だつたんでしょう。

それでもこういう今の様な時代を知らないから、それが当たり前だつたんです。別に不思議でも何でも無くて、弁当持たずに出て、「シシヨウケ」「ショクドウ」まで行つて、突きん棒で魚を突いて、エビを突いて、それを炙つて喰つて、それで飢えをしのいで帰つて来ても、別にそれが珍しい事でもなければ、あんでもないただ普通の事でした。

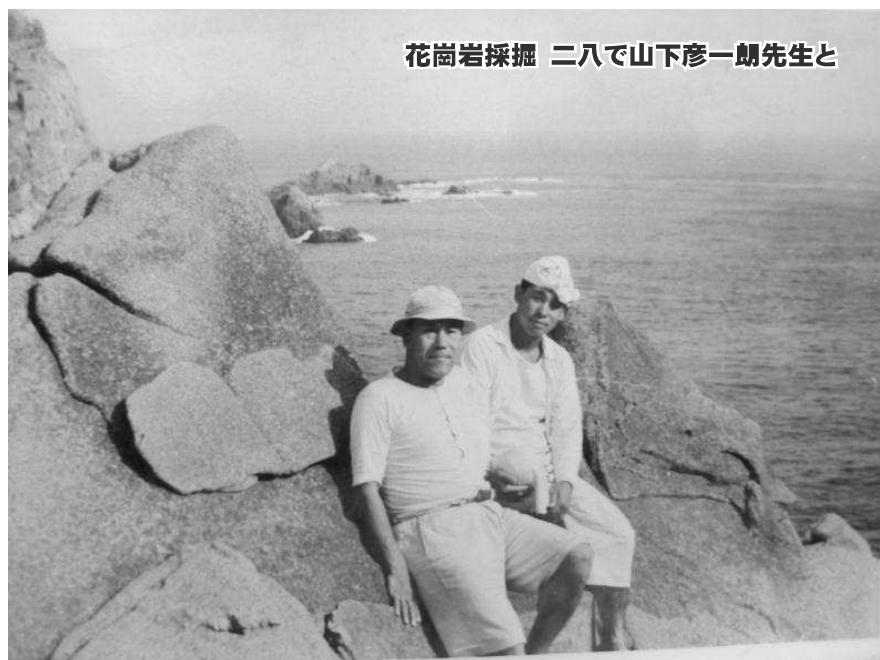
ですからあんな時代を生きてくると強いんです。何が来たつていってもそんなには驚かない。（笑）

そんな貧しい、すごく貧しい時代を過ぎて暮して来たんで、今は一人で暮らしてどんな事があつても平気なもんですよ。

貧しいといえば、明治二十六年生まれだつたこの家のばあさんと「こびきや」隠居のばあさんが家の縁側でよく話をしていて飢饉の話も聞いたことがあります。

この家のばあさんが昔聞いた話と言つていたので、たぶん徳川時代だと思いますが何回か飢饉が起きて、一年に七時化も時化た年がつて、イモも麦も採れなかつたんでしょう、海にも出られず、喰えるものは喰いつくしてしまつた。ここに居てもしようがないので、大島へ行けばイモがあつてなんとかなるだらうということで、二月六日に「伝馬船」に子供から親まで積んで、飢饉で喰えなかつたのでふんばつて櫓を漕ぐこともできなかつたんでしょう、南風がそよ

花崗岩採掘 二八で山下彦一朗先生と



そよと吹いていたので帆を掛けて向つたみたいです。

見送った人達が「横瀬」まで行つて見たと言つていたので、昔の宮塚へ行く旧道の「うばらの水」あたりまで行くと、見通しがきいて大島まで見えるので、そこで見守つていたんでしょう。そこまで行くのにも、昔のことですから「沖ん沢」から上がって行つて、「鍛治山」を上がって、「三合坂」を登つて、「横瀬」に出て、「うばらの水」に着くので容易ではありません。特に三合坂は「つづき」方面からこの坂まで登ると、三合の飯を食いたくなるほど腹が減る坂だと云われていました。

そうして大変な思いをして行つて見ると、もう昼も過ぎてているのに帆をまいて、大島を向いて走つていたとのことです。二月といえれば日の落ちるのも早いし、向こうに行つて風が出てきたのかは知りませんが、大島の差木地で突かし上がつてしまつたそうです。

もう日も落ちた後で暗い中、助かる者は助かつたみたいですが、そ

の最中に船から陸に向かつて赤ん坊を抱いて「この子を投げるどー！」と言つて放り投げると、「おー！」と言つて、投げられたその子を受け取つたそうです。その時に亡くなつた人達の墓が今も差木地に「神津墓」としてあると聞きました。

その年に神津中で生まれた人は、「勘三郎」のおおじんじいとあと一人、天にも地にも二人しか生まれなかつたそうです。食糧が無かつたので子供も産めなかつたんでしょう。

「勘三郎」のおおじんじいは私も知つていて、「伝八」のじいさん等と子供を集めて伝八で昔話を面白可笑しく話してくれて、私も子供の頃、仲間と行つて聞いていたのを懐かしく思い出します。

喰える物を喰いつくして飢饉が起くるんでしょうから、いつたい島全体がどういう状態だったのか、「アマドコロ」まで喰つたと聞いているので物凄いものだつたと思います。

ユリ科の植物で生姜しょうがみたいな根つこになつていて、昔は食べる人も

山ブドウの葉っぱを食つたり、やれ、あれえ喰つたあ、これえ喰つたあしつて木の芽を喰つて過ごしたのが、昭和十九年頃から始まって戦争が終わつたのが二十年で、二十二年頃迄でしょうか、その頃にアメリカから連合軍の援助物資が来て、トウモロコシの粉末が一斗缶で村から配給になりました。「オートミール」とか書いてありました。そのパウダーミみたいな粉をじいさん、ばあさん、父ちゃん、母ちゃんも初めて見る物でした。こうして食べるんだ、とかは書いてなくて、どうやつて食べたらいいのか分からぬわけです。それでもこれでも何か、あれこれにして食べた憶えがあります。そして、食糧つていうのは、すごいもんだなあ！と思いました。それまで、戦争が終わつて「夏飛び」漁などに出ても、栄養不足で手足等が、かんだるくて泳げなくなつていたのですが、そのオートミールの粉を食うようになつてから、身体のかんだるさが無くなつて普通に平気で泳がれるようになりました。食べる物の大しさというの凄い



恩馳 海鳥の群れ

いたみたいですが、これが食える訳は無いなと思つて私も炙つて喰つてみたことがあります。何か毒つ氣があるみたいでとても人間が食べるようなものじやありませんでした。

終戦前後は食糧が無くなつて、それは酷いものでした。まとまつた物を食べた！というような記憶は無いです。まあ沖に行けば魚が獲れて・・・といつても魚だけ食つたりやあいいつてもんでもないし、米を食つたという記憶は二年や三年は無かつたと思います。

もんだなあと、その時つくづくそう思いました。まだ十七・十八歳頃のことです。

その頃「久エ門」の船に乗っていたのですが、その船が爆弾で焼かれて、「萬作」から船を借りて「はえ飛び」をしていました。

新船を造るということで下田の「やぶ造船」で造っていたのですが、船大工が食べる物が無くて船を造ることができないということで、麦を皆で1升ずつ出し合って送った憶えもあります。下田でさえそういうなんですから、神津のような島では「無いのが当たり前」という感じでした。

昭和二十二年になつても、まだ生活に食糧が足りているということはありませんでした。

どこも貧しくて、日照りで利島に水が無くなつたということで、出川太吉さんが当時の農協の組合長をやつていてその人が頭になつて、沢尻から流れ出ている水を消防ポンプで船いっぱいに積みこん

で利島に持つて行きました。着くと利島の若い人達が全部出てきて、その水を「ドウコウ」でかき上げて運んで行きます。そして真中から割ると中が黄色くなっているイモと、イモの蔓苗をもらつて戻つて来ました。何杯持つて行つたのか、私も二航海ほど行つた記憶があります。

まあなんだかんだ言つてもこの時代には、まあ国は貧乏にならうがなんだろうが、昔に比べれば人間の生活は案外と楽で、なんとなく生きていられて・・こんな身体になつても生きていられるんですから。(笑)



(以上聞き書き)

子供の頃からの半生記

大正十五年十一月三日生 八十四歳

鈴木つる子（鈴久）

私は「新エ門」の長女で、七人兄妹の一番上です。すぐ下が「さかんや」の啓吉で、その次が「万次」の葉子、神戸に弟がいて、新エ門の東二、伊東に弟がいて、そして一番下が里江になります。七人もいると歳も離れていて、末っ子の里江が生まれて一週間程して、私がこの家のお父さんを産みました。長男は亡くしていたので次男になります。ですから小母さんと甥っ子が同級生ということになります。私はこの妹と息子を双子みたいに抱えて一緒に乳を飲ませていました。

昔は現金収入があまりない時代だったので、七人も子供がいて食べさせるのに大変で、新エ門のお父さんは天草を潜つたり、マンガーをしょぼいたりして暮してきました。

子供の頃の私は、今の子供と違つて遊ぶどころではありませんでした。長女に生まれて、三人目の万次の葉子が生まれた七歳ぐらいから、ずーと子守をさせられて背中に背負いながしでした。学校に行こうとすると、「学校へ行くだら赤子あかごを背負せよってけ」と言われて、「行かなれば、畠へとあいべ」と言つて畠へとしょぼかれて行って、畠のあぜで子守をさせられていました。

学校に行つたら行つたで、赤ん坊が泣くと教室には居られなくて、廊下に出てあやしたりしていました。そうして暮してきたので、学校に通つてはいても、ろくに勉強もしたのか、しなかつたのかという感じです。

そして登下校時とかに本を読みながら赤ん坊を背負つて歩いていました

りすると、友達にからかわれたものでした。（笑）

それでも、裁縫の授業があつて、「何か縫う布を持つて来なさい」と言われても、親が用意してくれるわけでもないので、友達の着古いた着物を貰ってきて、それをほどいて、袖^{そで}付けは何センチあつてというふうに自分で書き留めて、それをまた縫い合わせて仕立て上げました。

そんなそもくをしーしー習つたので、着物はどうにか、半纏^{はんてん}

とか普段に自分が着るぐらいの物は、買つたり頼まなくとも一人で一人前に縫えるようになりました。

その当時、学校は高等科二年までありました、でも家の方が「いつまで学校に歩つてーるだ！」と許してくれず、高等科一年までは、どうにかこうにか逃げ隠れしながら通つていきましたが、二年になると、それこそ後を追つかけて引きずり返さないばっかりになつて、とうとう高等科二年に進級してすぐにやめることになつてしましました。そして先生に学校をやめるのを云いに行つた時、名前は忘れてしまいましたが、まるで軍隊あがりのような、いつも長ーい軍刀を提げて飾つている先生でしたが、「学校をやめなければならなくなつたので、学校をやめます」と言つたら、その先生の言い草が憎つたらしくて「学校をやめて、姉ーらになりたいのか」と言わされました。

頭にきて「先生、家の都合で、親がもう学校にあげてらんないして言われるもんが、自分は学校へ行きたいくつて思つても、親がやつてくれ



れなきやあ、しようがないでしようと先生に言つてやりました。姉ーらになりたいのかつしたものんがなー、んーじやあやあ、しやはあやあやー（笑）。そして私の学生時代は終わりました・・・

学校を出てからも神津には居ましたが、でもその間に、海藻部といつて神津の若い娘達が二十人程かり出されて、附糊工場に行つて働いていたのですが、十六、七歳の頃、疎開する前に私も一緒に行つて、新小岩と西多摩の附糊工場で二年程働きました。

附糊というのは、神津でいう「おんごう」とか「ぎんば」のような海藻で、まるで天草を干すように、セイロに広げたその赤い海藻が白くなるまで天日で干して、それを煮て作る糊（接着剤）です。

憶えているのは、干している時に雨が降つて水に浸かるとダメになるので、親方が雨が降ると大声で「かけ！かけ！」といつて取り込みに走るのですが、「雨が降つてきたから、取り込みに出ろー」と云えば分かるのですが、最初のうちは皆何を云つているのか訳が分

からなくて、「あに〜カケカケつつーだろーやあやい？」と言つて皆顔を見合わせてポカーンとしていたこともありました。

二十人ぐらいづつ神津のほんどの姉ーらが附糊工場に来ていたので、その頃神津では兄ーらが「まつたくやい、神津の姉ーらは、ひとりも居なくなつてまつたあ」と言つて騒いでいたということです（笑）。

その後、兵衛門のつる子ばあさんの紹介で、横浜の食品（缶詰）会社の社長さんの家に



御屋敷奉公に出ました。そこで一年程働いていて、そこの奥さんが妊娠して産み月も近くなり、疎開に出ることになりました。

奥さんから「つるさんも一緒に疎開地に行つて」と言わされていて、私も一緒に疎開に行くつもりでした。でも神津の方からもう帰つて来いということで連れに来られてしまい、結局神津に戻されてしまいました。

疎開の時の話もしたいと思います。十六・十七の時には、もう戦争だ、戦争だという時代に入りました。疎開になつたのは、最初、恩馳が襲撃されて、それから河原村が空襲されました。たしか「文造」の下あたり、「たじえも多次工門」ぐらいまで焼けてしまつたと思います。

私達はいつも、今の資料館の下に二つほど並んである防空壕に逃げ込んでしやがんでいましたが、その時神社の方の防空壕に逃げようとしていた「善次」の若い男の子が、防空壕までもう少しの処で爆

撃で亡くなつてしましました。それから空襲だ、空襲だという騒ぎが続くことになつて疎開が始まつたんだと思います。

一区から疎開が始まつて、親戚のある家は早々と先に出て、九区は最後になりました。二十年六月頃だつたと思います、私が十七歳で啓吉は十五歳でした。船で伊東に着いたら、すぐに空襲だ！という知らせで爆撃があり、直ではありませんでしたが旅館か何処かあまり記憶はありませんが避難してやり過ごしました。

そんなこんなで、結局伊東には泊らずに、ひのばら桧原村まで行くことになりました。私達九区の仲間は、市平・幸内・新工門・伝八の人達で身体の不自由な人が多くて、一台のリヤカーを引きながら行くのも大変で本当に容易なことではありませんでした。それに加えて神津から送つた食糧から着替えから全部入つた荷物も、伊東止まりで九区の分だけは、とうとう届くことはありませんでした。

桧原村へ着くまでに、腹が減つて減つて、もう動けないようになつ

て、学校のような所で休むばーと言つていたら、土地の人がおにぎりを作つて持つて来てくれて、みんなでおにぎりを一つづつ貰つて食べました。そんな記憶もあります。

そしてやつとのことで桧原村へ着いたと思ったら、今度は何処にも受け入れる所がありません。他の九区の人達はちゃんと居場所がなくて、もう落ち着いているのに、私達の仲間だけありませんでした。何処に行つても受けてくれる所は無くて、結局しようがないということです。新エ門の家族が連れて行かれたのは牛小屋のような所でした。間仕切りはカーテンのような布が張つてあって、そのカーテンの向こうには牛がいて、糞尿する音が聞こえるような所でした。

そして荷物が届かなくて、食糧は無いし、着る物は無いしという状況で戻るまでの一ヶ月を過ごすことになりました。

配給があつて啓吉が貰いに出かけるのですが、いつたいどこら辺まで行つたのか、貰つて帰つてくるのは一日がかりで、中身は米では

なくて茹でたジャガイモと大豆だけでした。

私達新エ門の家族の居た所は、住んでいる場所から少し歩いた所に水車小屋があつて、地元のじいさんが「そこで豆を挽いていいよ」と言つてやり方も教えてくれたので、大豆を「きな粉」に挽いてもらつて、それをなめたり、ジャガイモを少しづつ茹でて食べたりといつた生活でした。

子供は私を入れて四人居て、食べた後にはよく親から「きな粉をなめたらなあ、寝てえれよ、にしらあ動くなよ、動くと腹が減るしか寝てえれ、寝てえれ！」と云われたものでした。

そんな生活でしたが、ある日大豆を挽きに水車小屋に行くと、教えてくれた地元のじいさんが居たので、「よくまあ、こんな処で暮らしてーるねえ」と言つたら、そのじいさんは「住めば都でねー」と言いました。そんなそもそもをしながら、一ヶ月ぐらい桧原村に居ました。

ここに住んでいる人は、ただ山ばかりのよう見える所で、畑なんかもそこら辺にはあまり見えないみたいだし、何処にも出かけないでいるように見えたので、いったい何の仕事をして、何を食べているのか分からぬようなところがありました。

そして終戦になつてそろそろ帰れると思つていた時、赤痢が流行つてきて隣村がすごいことになつてゐるという事で、赤痢がこつちの桧原村へ感染してこないうちに早く帰れということになつて、そのおかげで九区は一番先に神津へ帰ることができました。

帰りの船では近くに他の船が来ると、敵船か日本の船か見わけが付かなかつたのか、小父さん達が「船が近づいて來たあ、姉えらあ早く船下へと潜り込め！」と言われて、私達はかまわず船下へと潜り込まされて、隠れ隠れして來ました。

もう二度とこんな疎開に行くような経験はしたくありません。もしまたこんな状況が起きたりなんかしたら、今の時代の人達だったら

死んでしまう人もいるんじやないでしようか。

また当時の若い男の人達は、ある年は七、八人が出兵して戦地に送られ、帰つて来たのは一人だけということもありました。その上下の年代の人達も含めると、どれくらいの人達が戦死したのでしょうか。神津の未来ある青年が命を奪われて、残された妻や家族は男手の欠けたなかで大変な生活をしていました。戦争のせいでどれほどの人的人生が變つてしまつたことでしょう。今では考えられない時代でした。

それから何十年も経つた頃に丸甚のおじいさんが来て「鈴久やい、桧原村がすつごく變つて都會のようになつてしまつてえるつつうしかしでーて行つてみないかあ、皆で行くだしかいあいべよ」と誘いに来てくれました。でも私は辛い生活だったので「桧原村なんか名前聞くもやうだー、おいや行きたかーないや」と言つてとうとう行きました。

疎開から帰つて来て、どれくらい経つてからか、縁あつて「久エ」に嫁に行くことになりました。この久エという家は、当時はすごい「あばら家」で、「裏から入つて、裏から抜けるようなあばら家だ」と言われました。本当に落つこぼれていくような家でした。それでも、新エ門の母と兄弟になる「きよや」の善太郎叔父さんが大工をしていて、外回りから、縁側もない家だったでので縁側も取り付けてくれました。

久エという家は、昔、夫の譲一の姉で鉄砲場で暮していた藤井ふくさんの男親にあたる人ですが、そのじいさんが急に、おふくさんが赤ん坊の時に、「何処だかに何かをしに行つてくる」と言つて出たまんま「にっぽんざえもん日本左衛門」（行方不明・放浪人）になつて、六つとか七つになるまで、久エに帰つて来なかつたということです。

私の姑の、おらんばあさんも凄くおつかしいばあさんだつたので、何かあつて出たのかも知れません。何かしに行くと言つて出たので、

帰つて来るかと思つて六年もの間待つていたらしいです。それでも帰つて来なくて、その後、「かめん川」の方の「源次げんじ」の定じいさんが婿に入つて、譲一兄妹が生まれたそうです。

私が嫁に来て何年か経つた頃、仲間達三・四人と天草を潜りに、長浜へ行つた時のことです。長浜のすぐとつつきの「もつかん」の処で、トンネルのようになつている上の方に、雨つゆがしのげて、囮えば人間が一人ぐらいは住まわれるような洞穴ほらあながあつて、その日本左衛門になつていたじいさんが、帰つて来て、久エに戻ることはできず、そこで暮していいたらしいです。

そしてそこを通つた時に呼び止められて、誰に聞いたのか「にしやあ、久エに嫁に入つてーる姉あねえだか?」と聞いてきました。

「うん」と言つたら、「おいやその久エに居た爺じいさんだ」と言つてきました。私はその人のことは聞かされていなくて、何も知りませんでした。

そしたらその爺さんが言うのには「久エには昔な、杵でーて小突かれ死んだ人があつて、その念いで三年祟ると云われた、そしてそれはオイの代でーて三年だつた。

そだしかい、その三年が通つてしまーなかつたしかい、おらーまあこういうふうに久エじやあ暮されずに出ただ」というようなことを云つて「そうだけん、はい三年が通つたしかいでーて、あんたは久エに落ち着くらじやあ」と、そして「おらーはい久エのその厄は三年とか因縁が続くつして云われたけんども、その因縁が解けるしかいで、おいが代で、はいその因縁は解けたと思うしかいで、にしが代になつたら、乙良おつよく暮されんらじやあ」して、その爺さんに云われました。

久エに来てから、子供は三人できました。一人女の子を亡くしましたが、長男を大工にさせて、家もちゃんと建ててもらおうと思つていきました。昔は高校へはあまり行かなかつたので、中学を卒業し

てから静岡や都内、そしておふくばあさんの娘が大工の親方と暮していたので、そこで修業して一人前になつて帰つて来ました。今の「勘五」の家を一人で建てたのが一番最初にやつた仕事です。そしてこの家もほとんど一人で建ててくれました。

私の方は「久六」の「神津島建設」が始まつたので、そこで働かせてもらつていました。でも四十三歳の時、天草を探りに行つて「ジナエカマ」で潜つてている時に下腹が痛くて痛くてたまらなくなつて、



河原たちもとの砂防工事

陸に上がると出血もしてきました。

これは大変だということになつて、ちょうど東京と九州の小母さんも来ていたので、一緒に上京してもらつて、おふくばあさんが御徒町に住んでいた頃だったので、病院に連れて行つてもらいました。病院では「子宮筋腫」と云われて、手術して摘出することになりましたが、普通は一週間程の入院が、私の場合は症状が重くて一ヶ月もかかつてしましました。

医者の先生から「女人には、無くてはならないものを、ほとんど取つてしまつたのですから、3年くらいは働かないように」と言わされて退院してきました。

帰つて来てからも術後の痛みが引けなくて、三ヶ月くらい休んで家に居ましたが、工事に歩いている仲間から「やーい、にしゃあいつまで遊んでーるだ、工事に出てきて昼間のお茶番で、お茶を沸かいたり、魚を炙つたり、そんなをやるように出でこーやー」と言わされました。

ました。

私も、いつまでも、こうしちゃあいらんないやなーと思つていたので、行くことにしました。でも、工事に行つたら行つたで、お茶番だけして遊んでいるわけにもいかなくて、どうしてもスコップを持つたり、物を担いだりして動いてしまうわけで、そうして働いていましたが、どうしてもできなくなつて辞めることにしました。

工事に出て働けなくなつて、どうやって金を稼いだらいいのか悩んで考えました。そして家ができる商売をと考えて、東京に出て、万年筆と帳面を持つて、あちこちの食堂を食べ歩きました。

かつ丼はこんな味、天丼はこんな味、親子丼はこんな味、そしてうどんはこんな味、等々と全部帳面に書き留めておきました。自由が丘に里江が居たので、そこで寝泊まりしながら、何日か、何軒か、食べ歩いて全部帳面に付けておきました。

そして帰つてから息子に、お客が入れるように家を改装して作つて

もらいました。最初は、うどんから何から全部自分の口で憶えた味で、こんな味だったという感じで、書いてあつた帳面を見ながら作つてみて、食器や調理道具は「冷やし中華」から「ざるそば」から全部、東京の「かつば橋」まで買いに行つて揃えて食堂を開きました。

昭和の四十四年頃のことです。

当時は、反対側の河原の道路は無くて、家の前の道路だけでした。夏の浜の商店もまだ無い時代で、村中の食堂も何軒もないでの、お客様もたくさん来てくれました。前の階段にみんな座つて順番が来るのを待つていて、今でいう「行列のできる店」みたいに結構繁盛しました。

そして今度は、今やっている「甘太郎」の話ですが、私は糖尿も患つていて、東京の板橋の豊島病院に通つていました。

その途中の大山駅の近くで丸い形の甘太郎を焼いているのを見て、「ううん、こんな商売もいいやなあ、これを、おいもやろうかなー」

と思つて見ていました。そのころ神津では「つるや」で一軒「たい焼き」を作つて売つていました。そしてまた「かつば橋」まで行つて、型の鉄板などを買つて作つてみることにしました。

ところが、始めようと思つてやつてみたのはいいのですが、ただ駅前で焼くのを見て憶えただけの素人なので、うまく焼けません。油も普通の缶の油を使って、粉も何もいい加減で、焼いているのを見て、これぐらいのトロミで、今度は上からかぶせて、こうしてやつて一らーなーくらいのものでした。

そして出来上がつた物は、アンコは固くなつて、上からかけたトロミの粉はだらだらになつて、それをひっくり返すのも容易ではありません。焼いても焼いても、だらだらしそうきのオシャカになつてしまつて、ダメになつたのを隣近所にくれ歩いていました。

幾日かそれを繰り返していて、どうしてもアンコが、煮た時はちょうどいいのですが、すぐに固くなつて売り物になりません。

これじやあ商売にはならないなあと思つて悩んでいましたが、恥を忍んで、つるやの和夫さんにアンコの煮方を教えてもらおうと、思いきつて行つてみることにしました。

教えてくれなければ、それまでだ、と思つて言つてみると、なんと丁寧にアンコの煮方を教えてくれました。おかげ様でその通りにやつてみると、本当にいつまでたつても同じような柔らかさで、ちょうど良いアンコを作ることができました。

そして今度は溶いた粉の方も、上からかけた分が上手く出来なくて、見栄えが悪いなあと思いながら焼いていたのですが、ある日、お客さんが入つて来て、私の焼くのをずっと見ていました。そしたらその観光客らしいお客様が「小母さん、小母さん、そういう焼き方じゃあダメですよ、私もこの商売をやつていたんです」と言つてきました。

そしてこっちへ来て、「粉を流して、アンコを入れたら、その隣の

型に蓋ふたになる粉を流して、そうしてこうやつて、ひっくり返せばきれいに出来るんですよ」と自分で焼いて見せてくれました。真似してやつてみると、なるほど、上手に焼くことができました。

油も液体の油で、乾くとこびりついたりしてとても汚かつたのですが、それも教えてもらって、それから固形の油を刷毛はけで塗つて使うようになりました。

当時はアンコを煮る小屋を外に作つてもらつていて、五升釜で小豆を煮て作つていました。鉄板も、そこに火床があつて、焼き過ぎたりして液体油のこびり付きが剥がれなくて難儀をしていました。

そこで焚き火をおこして鉄板を焼くと、こびり付いた物は剥がれるのですが、今度は肝心の鉄板が反そつて曲がつてしまします。

そしてまた反対面を薪まきで燃やして直すというあり様で、あつちを焼かれ、こつちを焼かれ、焼かれる鉄板の方が可哀そうという感じで、して一こ一して、これまでに三枚ぐらい鉄板をダメにしていま

した。

思いもかけず、お客に教えてもらつて、まあいい案配に、本当についてーらーなー、と思いました。

「およげたい焼き君」が売れていた頃、たいやきブームが起こつて、たい焼きもやつたらどうかという話もありましたが、「かつば橋」に行つて聞いてみたら、たい焼き器は二十九三十万円もするというので、元が取れないと思い、私はたい焼きはやりませんでした。

弟妹も、神戸で暮らしていた弟と、新エ門の弟、さかんやの啓吉も亡くなつて、今は私と万次の葉子、伊東の弟、自由が丘の妹の四人になりました。

この家も忙しい家なので、今はデイサービスに行って、みんなとしやべるぐらいが楽しみなことです。働いても働いても、これで良いつつーことは無くて、まあーこうなるまでには本当に、しやばの辛苦をしてきました。どんな事もあつたつきやあー、容易じやあななか

つたあやあ、まつたく。

それでも、その昔、日本左衛門のじいさんに「にしが代になつたら、乙良おつよく暮されんらじやあ」と云われた、そのお陰かどうか？

云われたとおり、こうしてずーと暮していられます。(笑)。



思い出すこと

大正十四年七月四日生 八十五歳

前田喜曾子（下駄屋）

私は『下駄屋』の五人兄妹の四番目で、下に妹がいます。数年前に長兄が亡くなり、今は兄妹も私と妹の二人になってしましました。一番上の姉は浅草の方に住んで居て、昭和二十年三月十日の東京大空襲のとき、二人の子供を連れて隅田川の方に逃げたそうですが、逃げ遅れて亡くなりました。

亡くなつたといつてもだれも確認していません。その時は大勢の人が亡くなり、身元の判らない遺体は上野の山に大きな穴を掘つて埋めたそうです。姉親子もそこに埋まっているのだと思います。

次兄は東京へ働きながら勉強に出て、病気になり十七才の夏に亡くなつてしましました。私には良い姉と兄で、この二人が生きていたら、私の人生もだいぶ違っていたと思います。長兄も私も妹もこの二人の倍以上を生きて、早く亡くなつた人は可哀想です。

学校に通つてゐる時分は戦争があつたりして、尋常高等小学校から国民学校に名前が変つたりした時代でした。

高等小学校の時のことで思い出されるのは、当時の「長沢」は子供達のもので、そこで天草などを潜つていました。

今は長沢の磯のほとんどは埋め立てられ、駐車場になつてしまいま



昭和7年頃、右から次兄、妹、私、従姉

したが、四十年位前までは潮が引くと池のようになり、小さい子供が泳いで遊ぶには良い場所でした。

今でもなぎさ橋の辺りが長沢のなごりで、保育園児が遊んだり、誰かが海苔を探つたりしているのを見ます。

ちよつと沖の『まない』と呼ばれていた辺りからずっと天草がおいて（生えて）、危なげなく子供が天草を探つたものでした。

十五歳くらいの時のことですが、長沢に『カビ』（白い石灰状の物が付着した天草）がすごくおいた年で、カビは天草よりランクが落ちて安いのですが、そこを四つに区切つて分団で四班に分かれて採りました。

先生から「いっくらか潜れば修学旅行に連れてつてやるから」と云われて、修学旅行に行きたいがために頑張つて皆でけつこうな量を採りました。でもそれを売つたお金だけでは足りず、各家で十五円づつ出し合うことになりました。大和らで売つていた大きな飴玉が

二個で一銭の頃でした。みんなが貧しくて、その頃十五円を出すのも大変だったと思います。それでも大量のカビのおかげで修学旅行に行くことができました。

乗つた船は高砂丸だったと思いますが、小つこい船で、波でゴロゴロと転がされたり、荷物も一緒に客室に運び入れていたので「すべり止め」で荷物の間に寝たりして東京経由で向いました。

服装は下駄や草履をはいて着物を着て、京都までは行けませんでしたが、伊勢神宮などを観に行くことができました。

途中、たしか熱田神宮に向かう途中の駅で一人迷子になってしまい、集合時間になつても戻つてこなくて、先生達が探しに行つたことがありました。勝手に自分でどこかに行つてしまつたとはいえ、当時の島から出たことも無い、内地を見たことも無い、そんな子供が迷子になつてしまい、本人はどんなに不安だったか、また先生方もさぞかし心配しただらうと思います。

そんなこともありましたが、この世代で修学旅行に行けたのは、後にも先にも私達の学年だけだつたと思います。

あと戦時中のことですが、戦意高揚のためか、健康優良児を選ぶということで、いろんな体力測定の運動をして、男子と女子で四人づつ、女子は私と『五郎^{ごろう}正門^{せいもん}』の絹子さんともう一人の四人が選ばれ、若い時には丈夫だったのに絹子さんも私も中年過ぎには弱くなつてしましました。

前田の先祖は『市郎平』が一番の親元になるんだと思います。下駄屋という屋号になった由来は、私達の孫じいさんが東京に出て下駄作りの職人になつて、特にお店は構えず注文製作で、夜店が出るときなどには出店して結構繁盛していたらしくて、そこから下駄屋と呼ばれるようになつたということです。

おばあさんは富山の人で、けつこうな資産家の家に生まれて、行儀見習いで加賀百万石の江戸屋敷にあがつっていました。行儀見習いは

奉公と違つてお嬢様の花嫁修業のようなもので、富山の家の父の従姉になる人は上野の寛永寺に行儀見習いに上がつたそうです。さぞ厳しかつたことでしょう。私にはできません。その加賀のお屋敷におじいさんが自分の作った下駄を納めに行つて知り合つたのだと思います。

結婚して当時の江戸で暮らしていくて、子供も三人居ましたが、おじいさんが体調を崩して、その親の曾じいさんは『市平』の人で、今この家の建つている所で隠居暮らしをしていたので、一緒に暮らされるから神津に帰つて來いということで、夫婦二人で神津に來たそうです。その頃は内地から入つて来るお嫁さんはほとんどいなくて珍^{めずら}しい時代で、こんな小さな家で庭と苗場があつてという感じの所に来て、よく一緒に暮らしたものだと不思議に思います。

年寄りだけで暮らすのは大変だとなつたものの、私にとつて伯父さんにあたるこの家の長男が和裁の私塾をやつていて、以前、石野田

ふくさんが作文集に書いてあつた和裁を教えている辰おじさんという人ですが、仕事が忙しくて島には帰らないということで、末っ子だつた父が当時まだ独身で大蔵省に勤めていたのですが、そこを辞めて親を見るために神津へ帰つて来て、小学校の教員をして親の面倒を見ました。

母親は磯三郎の出で、東京の開業医で奉公をしていましたが、丁度そのころ奉公をやめて神津へ帰つて来たので、勧められて父と結婚しました。

母の姉と妹の三姉妹でとても仲が良くて、何をするにも助け合つて暮らしました。それぞれの子供達も皆兄弟姉妹のようになつて暮らし



昭和28年子供達と

ました。今でも丸一建材の富江や孫八の瑞枝、急逝した万作丸の依子達は私のことを「ねーちゃん」と呼んでくれます。

学校を卒業したのが十五歳で、姉の世話で東京浅草の田原町にあつた洋裁学校に通つていましたが、東京に住んでいた上の兄が学校の先生になつたために、神津に戻つてこれなくなつてしまつて、まだ一年も通つていなかつたのですが、父と同じで、私が神津に呼び戻されて家を継ぐことになりました。

当時の神津は自給自足の生活だったので、親がもつと元気で百姓仕事でもなんでもできれば良かつたのですが、あまり達者ではなかつたので、今度は私が面倒をみるとことになり、親と妹と四人で暮らすことになりました。でもその頃の私は身体が達者だったので、何をやつても楽しかつたです。

戦争でこちら辺も危なくなつて、疎開をするのですが、疎開前までは、神津には牛がたくさんいました。牧場とかではなく、皆家の

敷地で飼つていて、人も牛も一緒に暮らしているという感じでした。

二百頭ぐらいはいたんじゃないでしょうか。全部が牛乳を出すわけではありませんが、農協関係の『畜産組合』で、当時『バタ屋』と呼ばれていた牛乳の集荷場が寺道の徳吉のあつたところにあり、私はそこで働かせてもらいました。

牛乳の販売は神津の中で欲しい人達が大体決まっていて、スタンドの石野田多喜男さん等男の子四人が、当時は冬でも裸足で履き物も履かず、ぼつた（厚ぼつたい袢纏のような着物）を着て腰には藁縄をしめて、アルバイトの牛乳配達をしていました。その格好は今の時代になつても思い出すと可笑しくなります。

バターも作つて内地に出荷していました。バター作りは当時の『三宅』のおばさんが作っていました。台の上にビヤ樽のような丸い樽が取り付けてあって、レバーを回すとその樽がゴットン、ゴットンと音をたてて回るようになつていました。

樽には小さなガラス窓が付いていて、そこにバターがくつ付いてくるのを見て出来上がりを確認していました。今でも同じようにすればバターを作れると思います。

バタ下（乳清）は人が飲むようなものではないんですが、それを子豚に飲ませると栄養が付くのか、早く育ち上がるようで、特に夏休みとかは豚を飼っている家の子供達が、入れ物を持つて毎日大勢買いました。

そして、栄養があつていいというのと、生牛乳では脂肪分が強すぎて嫌われたのか、バタ下の方を赤ん坊にも飲ませたりしました。私も終戦後で栄養失調状態で母乳の出が悪かつたので、上の二人の

子には母乳の足しに飲ませました。

それほどたくさんいた牛も、戦争が酷くなつて売つたり、疎開が始まるといふことで、みんな屠殺とさつされてしまつた。そして牛を飼っていた家では、その肉を塩でしめて乾燥させて、疎開時の食糧に持つて行きました。それを見て、食べてみたいなあと思つていましたが、友達が家で牛を飼つていて、乾燥したその肉を削つて、食べさせてくれました。美味しかつたです。そういう訳で、為造とか三宅とか清次などに残つた数頭が最後で、あれだけたくさんいた牛も今は神津から一頭も居なくなつてしましました。



孫娘達と

戦争が激しくなり私達家族も疎開に行くことになりました。東京西多摩郡檜原村の、山で分けられた一番奥の方にある数馬かずまという所です。三頭山みとうさんという山が東京と山梨の境になつていて、そこが九区の人達の疎開先でした。

着くまでも大変で、若い者は荷物を積み込んだ大八車を引っ張つていけといふことで、私達がそれを引いたり押したりして行きました。でも重いやら遠いやらで、もう途中で疲れ切つてしまつて、近所の達者な小母さんが何も持たずに歩いていたりしたので、「はい、嫌やーだ！」ということになつて、みんなでんでに荷物を背負つたり、頭に乗つたりしてなんとかたどり着きました。

でも疎開先は山奥で家も一軒一軒離れていて、飛行機も何も飛んでくることは無かつたので、空襲に遭うことはありませんでした。山なので水が豊富で湧き水やら、いたる所に水が流れていて、ワサビなんかも売つていました。おいしい水で、今考えてみると神津の

ひゅうが
日向の水みたいでした。

疎開先ではとても良く面倒をみてくれました。叔母家族（母の妹）と二軒の家を貸してくれて、そこに住み、大家の土間に竈があつて自由に使つていいということでした。

大家さんの方は昔ながらの囲炉裏があつて、鍋をさげて囲炉裏を囲んで何かを煮て食べていました。

ここで大変だったのは、米などの配給を貰いに行くことでした、地元の人が八里あると云つていた道を、朝も明け方に弁当を持って出かけて、桧原村の役場の配給所まで行くのに今まで歩いたことも無いぐらいの長い道のりを歩いて行つて、戻つて家に着くころにはもう暗くなつていきました。それも米が三日分ぐらいの配給になるはずが、いざ行つてみると一日分しかくれなくて、こんなに歩いて来たのに、明くる日にまた行くという感じでした。

配給物も米ではなく大豆がほとんどで、私達の処は水車はあつた

のですが、きな粉までにはできなくて、荒く挽いて米をちうつと入れて炊いて、それをご飯にして食べました。

神津に戻つてから他の地域に疎開していた友達から、水車で大豆を挽いてきな粉にして舐めたり食べたりしていたと言うのを聞いて、「いいつてなく、おらもきな粉を舐めたいや」と言いながら羨ましく思いました。

実は疎開する時、米は荷物の中に入れたりして、けつこうあつたのですが、伊東に着いて旅館にいる時、岸壁に積んであつた荷物が、浜で解きほぐされて置いてあると連絡があり、行つてみると盗られてしまつていて、結局、疎開地に行つたのは人間だけになつてしましました。

そして米だけではなく、疎開の生活では塩も無くなつてしまいまし
た。実は塩の方も、自分で塩^{しお}焚^{つつき}といつて、磯端^{いそっぽた}で薪^{まき}を集めて煮つめて作った塩がありました。それをたくさん持つて行つたのです

が、親が「こんな重たい物を何処まで持つだ！」と言つて、伊東の旅館の近所の人達にあげてしましました。結局、疎開先で塩が無くなってしまい、山を越えた隣の小河内おごうちに長助と与市ともう一軒の家族がいたので、そこまで貰いに行つたりしましたが、砂糖は無きやあ無いでどうにか我慢できるけれど、塩が無くなるのはすごい辛苦なことだなあとと思いました。

そこで、数馬は神津と同じで家を開けっぱなしで暮らしているので、申し訳ないと思いながらも、大家の人が何処かに出かけて誰も居なくなるのを待つて、黙つて塩を頂いてきました。

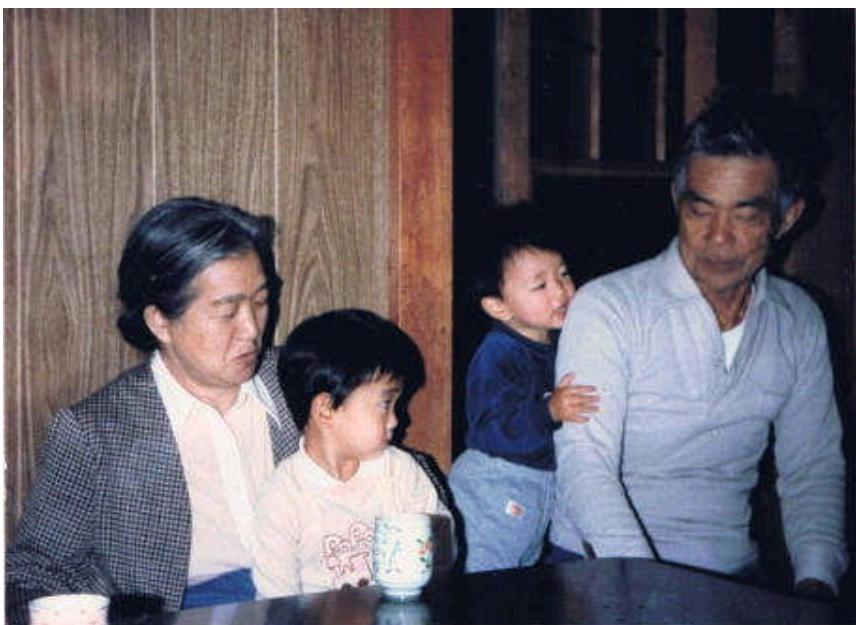
デイサービスに行つた時に、このことを話したら、一緒にいたおばあちゃんも話をし出して、やはり私と同じで、大家の家族が居ない時に塩を黙つてもらいに行つたそうです。

でも入れ物が無いので、着ている着物の中に詰め込んで帰つて来て、家で床に敷物を広げて、「ここいとな、塩を今はたくしかいでーて

な」と子供に言いながら、敷物の上で着物から塩をはたいてかかり集めたそうです。やつぱりみんな困ればそんな真似まねえするだんなーと思いました。

もう、あそこに長く居ればみんな死んでいたと思います。栄養失調と、夏なのに冷えて寒い処でした。ちょうど台風も来て、外との仕切りは障子だけの部屋に居たので、紙はボロボロになつて、そこから雨風が吹きこんで大変な思いもしました。

神津を出たのが七月の終わり頃で、半月程で終戦になつたのですが、



孫とおじいさん

戦争が終わってもまだ、飛行機が飛んでもると怖くて怖くて物陰に隠れたりしていました。すぐには神津に戻れなくて、九月の三日頃、一番先に帰つて来ることになりましたが、その時も船の中で女子供は隠しておかないとということで、皆、頭からカバーを被されて、ずっとしやがんで帰つてきました。

疎開に出る時には家族全員で行つて、もう戻つては来られないような気持になつていたので、芋も何も植えてはいませんでした。

ですから神津に戻つてからは食糧が乏しくて、帰つて来てからも大変でした。神津は昔は食糧といえば芋と麦でしたが、芋と麦が畑で採れる家は食べ物が良かつたですが、畑が少なく、そんなに麦も採れない家はやはり大変でした。

昭和二十八年にお父さん(夫)が結核を患い、手術や療養などで五年ほど入院し、退院後、豚を飼つたりもしました。余裕は無かつたのですが、『孫平』のおじさんが「豚を沢山飼うには車もなければ」

と言うので、おじさんの世話で車を買うことになりました。一トン半のトラックで最初からドアが付いていない車でした。

それでお父さんが車の免許を取らなければということで、東京に取りに行くことになつたのですが、学科は受かつても実地が大変だつたみたいで、車のエンジンを掛ける作も知らないような状態で、教官から「車に乗つた事があるか」と聞かれ、「乗つた事がある」と答えたものの、車の荷台に乗つて運んでもらつた事がある・・・・、という程度のものでした。それでも幸いなことに教習所の教官達と東京の八丁堀のおじさんが知り合つたせいか、二週間程でちゃんと免許を取つて帰つて来ました。

それから神津でも免許を取れるように教官が来てくれるということになつて、「取つとけばいいじええ」と言われて、私も一生懸命になつて免許を取りました。当時の神津では女人が運転免許を取るという考え方 자체が無い時代で、女人で取りに来たのが私と支庁勤め

の方の奥さん二人だけでした。

その後に『前田運送』を立上げました。運送の仕事をすることになるとは思いもよりませんでしたが、最初の頃は若い運転士もいましたが、いなくなつてからはお父さん一人では大変なので私も車を運転することになりました。まだ車 자체が少ない時代だったので助かりましたが、まったく昔の道路は舗装されている所も少なくて、狭くて雨が少しでも降るとすぐヌルヌルになつて、道路に穴が開いたり、上り下りでは特に大変でした。

道に穴が開くといえば、今の多幸と長浜に行く都道は戦時に作られたもので、道筋だけのような道路でしたが、大きな穴を掘つて落とし穴にして「アメリカ軍が戦車で上陸してきたら、この穴いと落ちようかすだ」と云つていました。当時は大真面目おまじめでしたが、今考えると面白く思い出されます。

運送業の方はその後も夫婦二人でやることになりました。五十集

の販売所で魚の荷造りをするのに漁協から氷を買つて運ぶのですが、今のように碎かれてはいなくて四角の塊のままだつたので、それを杵きねでぶつ碎かくのが大変でした、でも頭を使わない仕事の方がいいやと思ってぶつ碎く専門でやつていました。

それから観光客がたくさん来るようになつた頃ですが、当時は引き潮の時に砂利を海から直接上げて道路の脇に置いて、頼まれてその砂利をトラックにシヤベルで積んで運ぶのですが、その頃はもう無我夢中で仕事をしていた時期で、一〇分でトラック一杯に砂利を積めるようになつっていました。

私が道路で砂利を積んでいると、武左のおじいさんが通りかかる度に、「きそ子、がんばれよー」と励ましてくれて、嬉しかつたです。運送屋は昭和の五十五年ぐらいまでやつしていましたが、私の方が先に体が弱くなつてしましました。雇える人も見あたらなくて、もう二、三年はやりたいと思いましたが、一人では大変だということで

止めてしまって、もう三十年がたちました。

昔のこら辺は『初芳』あたりまでしか家がなくて、その先は麦畑、芋畑でした。夏になると皆朝早くに仕事や畑に出かけて、暑い日中は「日盛りーしんばあよー」と云つて休んでいて、家の窓も開け放して道路を通つても寝ているのが見えたりしていました。今は家も道路もだんだんと先の方へ増えていっています。

今と昔とどっちの方が良いかと聞かれると、今は隣近所との親密さもだんだんと薄れていっているようで、何も無かつた昔の方が良かつたかなとも思います。

今ホームのデイサービスに通つていますが、この頃は日にちだと曜日だとか、時間がどのくらい経つたとか分からぬ時があつて、本当にばけてしまうんじやないかと自分でも心配しています。(笑)

(以上書き書き)



孫の成人式

あ　と　が　き

「お年寄り作文集」の第十七集ができ上りましたので、皆様のお手元にお届けいたします。

物のあふれた便利な現代と違い、ずっと貧しい時代を過ごしてきて、関東大震災や、戦争、疎開等々、激動の時代を生き抜いてきた神津の人達の話は、同じ戦争、同じ疎開でも、その人その人で、全然違った体験と人生の重みが語られています。人の心を動かすものは、策や理論より実体験に勝るものはない、といいますが、これまでもに掲載された七十名以上の神津のお年よりの話は、全て実体験の貴重な作文集です。神津の若い人達にも読んで頂き、お年より達が若い頃経験してきた想いというものを感じて頂けたらと思います。

また、寄稿及び、聞き書きにご協力下さった方々には、厚く御礼申し上げます。

平成二十三年三月

神津島村社会福祉協議会

お年寄り作文集 第17集
発行 平成23年3月
神津島村社会福祉協議会
TEL 04992-8-0819